

報 告

大学1年次生の文章力の現状と課題 ～添削指導を中心に～

The Current Situation and Issues of writing skills of our freshmen,
focusing on correcting their writing.

溝端 剛^{*1}, 上野 輝夫^{*2}
半田 結^{*3}, 有田 伸弘^{*4}

要約: 本稿は、関西福祉大学社会福祉学部の2017年度後期の「キャリア形成Ⅱ」の授業の中で行われた文章力の添削指導に焦点を当て、そこから明らかとなった大学1年次生の文章力の現状と課題について報告したものである。事例を通じて、段落の書き始めは1マス空けるという基本中の基本ができていない、文体（ですます調、である調）の不統一、同じ語句・同じ内容文の繰り返し、話し言葉と書き言葉の混同、慣用表現が守られていない、主語-述語の不適切な対応、設問すら読んでいない、読んでも理解していないことなどを指摘した。その他、不適切な読点の打ち方、誤字、送り仮名の間違い、いくら添削指導しても文字が丁寧に正確に書けない、筆圧が弱くて読みにくい事例もあった。しかし、添削指導を重ねる中で、無謬ではないにしてもそれなりの文章を書くことができるようになっていく。この1年間の取り組みの「手応え」をもとに、自前の「協道学習教材」を通じて個々の学生の視点を広げ、その思考方法を尊重しながら、その都度添削指導をしていくという地道な教育を4年間継続して、正規のカリキュラムの下で行う必要性、特に1年次及び2年次には必修科目の中で行うことが大学教育に求められていることを指摘した。

Key Words: 文章力, 添削指導, 協道学習, 正規科目

1. はじめに

「中高生の読解力 大丈夫?」, これは、2017年11月7日付の朝日新聞朝刊の記事タイトルである。国立情報科学研究所の研究グループが全国の約2万4千人の中高生を対象に2016年4月から2017年7月にかけて実施した調査結果を報道したものである。その調査では、中高生の教科書や辞典、新聞記事などに掲載された文章を題材にして、基礎的な文法を踏まえていれば答えられるようにした問題が出題されている。その記事によれば、中学校社会科の教科書の文「幕府は、1639年、ポルトガル人を追放し、大名には沿岸の警備を命じた」と、「1639年、ポルトガル人は追放され、幕府は大名から沿岸の警備を命じられた」が同じ意味かを問うたところ、

中学生の42%、高校生の27%が「同じだ」と答えたという。生徒・学生の漢字力、語彙力、文章力の低下が叫ばれて久しいなか、驚くべきことではないかも知れない。中学生と高校生とで15ポイントの改善が見られることに安堵することもできるが、具体的に2文を読み比べて、同じ内容を指していると考えている高校生が4人に1人いるということは、やはり看過できない調査結果である。「同じだ」と答えた生徒はどう間違えて理解しているのだろうか。主語と述語の関係が理解できていないのか、それとも「幕府」と「大名」の関係が理解できていないのか、そもそも「幕府」や「大名」の意味が分かっていないのではないのか、いやこれらのいくつかが合わさっているのかも知れない、それとも…、といろいろと考えさせられる。

関西福祉大学（以下、「本学」と記す）においても、大学生の教養教育の一環として、2016年度から文章力の養成に取り組んでいるが、大学生の日本語力に関して「驚くべき」ことに遭遇することがある。たとえば、授業の中で、Yahoo!JAPANがニュースサイトのコメント投稿の禁止事項の1つとして挙げている「意図が伝わり

2018年2月14日受理

- *1 Takeshi MIZOBATA
関西福祉大学 社会福祉学部
*2 Teruo UENO
関西福祉大学 社会福祉学部
*3 Musubi HANDA
関西福祉大学 社会福祉学部
*4 Nobuhiro ARITA
関西福祉大学 社会福祉学部

難い伏せ字や隠語を含むコメント」の意味を問うたところ、「伏せ字」や「隠語」の意味を知っている学生はごく少数であった。多くの学生にとって、何かが禁止されていることは分かっているが、何が禁止されているか分かっていない状態であった。読み手側の理解力がこうでは、Yahoo!JAPANが「自由な意見交換の場」、「健全な言論空間」の創出を目指して「コメントに関する禁止事項」をいくら設けても、効果が期待できないのではと推測される。

また、後述するように、「ニュースサイトのコメント欄を健全な言論空間にするための対策として、①差別・排斥的な言論の削除・非表示、②同一人物によるとみられる大量投稿の削除・非表示、のどちらがより有効でしょうか。どちらかを選び、その問題点にも触れながら、あなたの考えを100字程度で書きなさい」という設問に、多くの学生が①又は②を選んだ上で、選ばなかった方の問題点を記述している。あるクラスでは24名中20名の学生がそうであった。添削指導で「その問題点」が何を指しているかを指摘して、再提出させると、ほとんどの学生が設問に沿った記述ができるようになっていく。これなどは、指示代名詞の理解、読解力が不足している事例である。

本学では、先にも少し触れたように、2016年度から学生の文章力の養成に取り組んでいる。2016年度は自主講座として、社会福祉学部及び看護学部の学生を対象に「文章力養成講座」を通年開講した。2017年度は、その効果を踏まえ、さらに発展させる形で、社会福祉学部の1年次生必修科目である「キャリア形成Ⅰ」（前期）及び「キャリア形成Ⅱ」（後期）において文章力の向上に取り組んできた。「文章力養成講座」の成果について、筆者らは2017年2月18日に開催された国際教養学会（JAIIA）の第6回全国大会（於同志社大学）で「関西福祉大学における文章力養成講座とその効果の検証」と題する報告を行ったが、その詳細については別稿に譲ることにして、本稿では、2017年度の「キャリア形成Ⅱ」の授業の中で行われた文章力の添削指導に焦点を当て、そこから明らかとなった大学1年次生の文章力の現状と課題について報告する。なお本報告は、平成29年に開催された関西福祉大学倫理審査委員会の承認を得て行った研究に基づいている。

2. 「キャリア形成Ⅱ」の授業概要について

添削指導の内容に入る前に、2017年度の「キャリア

形成Ⅰ」及び「キャリア形成Ⅱ」の科目全体を俯瞰しておきたい。

前期の「キャリア形成Ⅰ」では、2016年度の「文章力養成講座」の経験を生かして、朝日新聞社の「時事ワークシート」の中の「天声人語」（漢字）を主教材として、副教材に『日本語検定3級公式練習問題集3訂版』（東京書籍）を使用した。授業は、①『日本語検定3級公式練習問題集3訂版』から作成した小テストの実施、②「天声人語」の黙読、③音読、④朝日新聞社の『書き写しノート学習用』への書写、⑤担当教員が作成した「協道学習教材」（記事に関連した教材）を通じて「幅の広い教養」を身につける、⑥70字程度に要約し、10字以内のタイトルをつける、⑦担当教員が作成した要約・タイトル例をもとに、授業内で要約・タイトルを振り返る、という形で展開した。また適宜『書き写しノート』を提出させ、添削指導を行った。

後期の「キャリア形成Ⅱ」では、前半は「時事ワークシート」の中の「天声人語」（読み解き）を、後半は「新聞の読み解き」を主教材に使用し、『日本語検定2級公式練習問題集3訂版』（東京書籍）を副教材に使用した。前半は「キャリア形成Ⅰ」と同様の授業を展開したが、後半では、同一記事を2週にわたって読み込み、内容を深く理解するとともに視野を広げる授業を行った。その際、担当教員が作成した協道学習教材を活用することとした。

「天声人語」及び「新聞記事」の選定については、担当教員全員で教材研究を行い、それぞれの協道学習教材の作成担当者を決定した。またクラス編成について言えば、「文章力養成講座」では1クラス10名以下で実施できたが、「キャリア形成Ⅰ」では学籍番号順の5クラス編成で1クラス約25名、「キャリア形成Ⅱ」では学籍番号順の4クラス編成で1クラス30数名となった。

「新聞の読み解き」のワークシートはそれぞれ3問で構成され、第1問と第2問は新聞記事の読解力を問う問題で、第3問目は設問に対して自らの考えを100字程度で書かせる問題となっている。それに合わせる形で、授業では、100字縦書きの原稿用紙を自前で作成し、原稿用紙には、評価項目として、①文字をていねいに書くこと、②句読点を正しくつけること、③漢字を適切に使うこと、④内容を正しく把握すること、⑤その他（コメント欄）を設け、各クラス担当者がA・B・C・D・Fの総合評価をつけることとした。

「新聞の読み解き」のワークシートを使った授業の第1回目は、①『日本語検定2級公式練習問題集3訂版』

表1 2017年度後期「キャリア形成Ⅱ」の到達目標と講義概要

<p><授業の到達目標及びテーマ></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 社会で生起している諸問題（ニュース）を読み解き、自身の考えを文章にまとめる力を身につける 2. 大学教育を受けるに必要な日本語力及び大学卒業生に社会から求められる日本語力を身につける 3. 大学生としての学習習慣を身につける <p><授業の概要></p> <p>大学教育においては、身近な問題だけでなく、社会で起こっている事象を理解するとともに、学術書を読みこなす能力が不可欠である。当該授業では、さまざまなテーマの新聞記事を精読することによって、まず新しいことを知る楽しみを通じて知的好奇心を育み、さらに調べる力、考える力及び表現する力を身につけることを目標とする。</p>	
---	--

表2 2017年度後期「キャリア形成Ⅱ」授業内容

授業回	テスト類		時事ワークシート	協道学習教材担当者
1	Placement Test (日本語検定3級過去問)			
2	敬語① (日本語検定2級テキストより)	2017/04/03	天声人語「新入社員F君」	溝端
3	文法① (日本語検定2級テキストより)	2017/05/07	天声人語「竹林に学ぶ」	半田
4	敬語②文法② (日本語検定2級テキストより)	2017/06/10	天声人語「原子力機構の被曝事故」	有田
5	語彙① (日本語検定2級テキストより)	2017/07/30	天声人語「10浪を超えて」	上野
6	言葉の意味① (日本語検定2級テキストより)	2017/08/02	天声人語「アレッポのせっけん」	溝端
7	語彙②言葉の意味② (日本語検定2級テキストより)	2017/01/04	新聞の読み解き「能力を超える 情報の海」	上野
8	マナーの理解と習得			
9	表記① (日本語検定2級テキストより)	2017/01/04	新聞の読み解き「能力を超える 情報の海」	上野
10	漢字① (日本語検定2級テキストより)	2017/07/31	新聞の読み解き「ネット言論 荒らさせぬ」	有田
11	表記②漢字② (日本語検定2級テキストより)	2017/07/31	新聞の読み解き「ネット言論 荒らさせぬ」	有田
12	総合問題 (日本語検定2級テキストより)	2017/05/23	新聞の読み解き「子ども兵『地獄の日々』」	溝端
13		2017/05/23	新聞の読み解き「子ども兵『地獄の日々』」	溝端
14	マナーの理解と習得			
15	Achievement Test (日本語検定3級過去問)			

から作成した小テストの実施、②新聞記事を段落ごとに学生に読ませる、③新聞記事の内容を解説しながら理解を深める、④時事ワークシート「新聞の読み解き」の設問1と設問2を使って、読解力を確認する、⑤「新聞の読み解き」の設問3（記述問題）の下書きを宿題とする、という形で進行した。記事の音読は、全員が正しく読めるまで（多くて3回ぐらい）繰り返し行った。

第2回目は、①『日本語検定2級公式練習問題集3訂版』から作成した小テストの実施、②宿題の確認、③新聞記事を再度音読させる、④担当教員が作成した「協道学習教材」で記事の内容を広く深く学習する、⑤「新聞の読み解き」の設問3（記述問題）を100字縦書きの原稿用紙に記入させ、提出させる、という形で授業を展開した。提出物はクラス担当教員が添削し、後日返却した。その際、添削したものをPDFで保存し、担当教員全員が共有できるようにした。

表1は「キャリア形成Ⅱ」のシラバスの授業の到達目標と講義の概要である。また表2は実際の授業内容の一覧である。

次章では、この「新聞の読み解き」の第3問目に対する学生の文章力の添削指導を通じて明らかとなった大学1年次生の文章力の現状について、事例をもとに考察することにした。

3. 大学1年次生の文章力の現状

まず、「新聞の読み解き」のワークシートの第3問目を見ておきたい。

I. 2017年1月4日付の「能力を超える 情報の海」

「情報があふれる今の世の中で、情報に流されず適切な判断をしていくには、どのようなことが必要ですか。あなたの考えを100字程度で書きなさい。」

II. 2017年7月31日付の「ネット言論 荒らさせぬ」

「ニュースサイトのコメント欄を健全な言論空間にするための対策として、①差別・排斥的な言論の削除・非表示、②同一人物によるとみられる大量投稿の削除・非表示、のどちらがより有効でしょうか。どちらかを選び、その問題点にも触れながら、あなたの考えを100字程度で書きなさい。」

Ⅲ. 2017年5月23日付の「子ども兵『地獄の日々』」

「元戦闘員の子どもたちには、どんな支援や保護が必要ですか。その一つを挙げつつ、あなたが彼らの境遇について望むことを、100字程度で書きなさい。」

いずれも、「社会で生起している諸問題（ニュース）を読み解き、自身の考えを文章にまとめる力を身につける」という授業の到達目標に至るふさわしい記事として取り上げたものである。

学生の文章を添削して浮かび上がる問題を、いくつかのパターン—原稿用紙の使い方や文法上の問題など基本的な文章表現スキルが身につけていない複数の事例—に分類して、考察する。なお、添削指導で、＝は削除、〃は添削者が加筆した部分である。

1) まず、段落の書き始めは1マス空けるという基本中の基本ができていない学生が毎回見られた。あるクラスでは、1回目が12.5%（24名中3名）、その添削指導後の2回目でも27%（26名中7名）、さらに3回目でも24%（25名中6名）であった。1マス空けるように指導された後も空けていない学生、つまり添削されたものを読んでいないと解される学生、またそれまで1マス空けていたにもかかわらず、2回目や3回目の課題文で空けていない学生、つまり段落の書き始めは1マス空けるという基本が身につけていないと思われる学生がいることが分かる。

2) 次に文体（ですます調、である調）が統一されていない学生も毎回、少数ではあるが、見られた。この点で指摘を受けた学生を追跡すると、回を重ねるごとに改善されていた。

添削事例「メディアは確かに便利なもの＝です＝であるが、使い方を〃変えれば誤れば、一回の公表で人の人生を左右することがある。」（学生A）

また文章をすべて体言止めにしている学生もいた。

添削事例「サイトばかりを頼りにするのではなく、まず自分の考えを持つことが大切である。簡単に手に入れる情報を信じすぎないこと＝、楽ばかりしようとしないこと＝、自分の考えを持った上で本当に必要な情報のみを吸収できる〃メディアリテラシーが必要である。」（学生B）

この学生の文章はその後改善されたが、体言止めで文章を終える学生は他にもいた。

添削事例「例えば〃勉強が〃そうである。…その為にも少年たち〃をサポートしていくことが大切であ

る。」（学生C）

3) 同じ語句の繰り返しが、特に文末によく見られた。「…が大切である。」（その他に、「…と思った。」、「…と考える。」、「…して欲しい。」）ですべての文章が終わっている学生がいた。自分の考えや望みを述べる時は、文末にそのような言葉をつけないといけないと思っているかのようなのである。

添削事例「私は、①の方が健全な言論空間にするための対策としてより有効だと考える。しかし全ての批判的意見を消すことになってしまうと、肯定的意見ばかりになってしまうと、言論空間が成り立たなくなってしまうと〃考える〃恐れがある。」（学生D）

4) また、文章を「なので」、「そうしたら、」で始めてみたり、「…と思うし」、「…と思うけど、」と書いてみたり、話し言葉と書き言葉の区別ができていない学生もいた。次の学生Eはその典型である。

添削事例「〃そうしたらそうすれば、差別的な発言はそのサイトでなくなると思う〃けど、他のサイトでそのサイトが中傷されると思った。」（学生E）

「〃なので〃こういう理由で、同一人物による大量投稿の削除が有効だと思います。」（学生F）

「差別的、排斥的な表現のラインが曖昧なので、コメントを削除していてもキリがないと思う〃、そのようなコメントをするのは特定の人物だと思うので、私は、同一人物による大量投稿の削除・非表示に〃賛成である。」（学生G）

5) 「…たり、～たり」、「なぜなら…だから」といった慣用表現が守られていない学生もいた。

添削事例「自分で考えたり確認したりする事が必要だと考える。」（学生H）

「投稿することにより自分の位置情報が分かったり、店の評判なども投稿して便乗されると、嘘の情報まで流されたりする。」（学生I）

「なぜなら、〃私の考えは、一人の意見ではなく複数の人の意見を反映するためのコメント欄であるべきと〃考えているからである。」（学生J）

6) この学生Jもそうであるが、主語と述語が対応していないなど、主語—述語の関係が不適切な文章を書いている学生もいた。

添削事例「〃これらの対策として、私たちの情報処理などの一部をAIに委ねるといった〃策だ〃ことも一つの対策として考えられる。」（学生K）

次の学生は100文字の文章を1文で書いており、書き進めるうちに最初の主語が忘れられたと考えられる。「長文は悪文である」、文章を短くすること、そして書き終えた後で主語と述語が適切に対応しているかを確認するようコメント欄で指導した。

添削事例「私は、~~この記事を読んで~~ネット時代なので、正しい情報もあれば誤った情報も~~あり~~ある。その中ですべての情報を信じるのではなく、疑ってその問題について考えたり、新聞を読むなどしたりして、自分なりに情報収集を判断することが必要だ。」(学生I)

7) さらに、同一内容文の繰り返しも見られた。

添削事例「適切な判断をするためには、その情報を自分の頭で正しいかどうかを繊細に判断する必要があります。と思います。の真偽を見極める能力、つまり情報リテラシーが必要である。」(学生L)

「情報が溢れている現在、誤った情報に流されず適切な情報を選択することが大事である。インターネットの情報を全て鵜呑みにするのではなく、その情報が正しいかどうかを見極め、取捨選択していくことができる能力メディアリテラシーが私たちに求められる。」(学生M)

8) 次に、学生が設問を「読んでいないこと」、「読んで理解していないこと」が明らかになった。「1. はじめに」で触れたことでもあるが、非常に多く学生が、Ⅱの設問に対して、①又は②を選んだ上で、選ばなかった方の問題点を記述している。この間違いは「読んで理解していない」ことに起因していると思われるが、次の2つの事例は、設問を「読んでいないこと」を裏付けている。最初の事例は、文章としては問題ないが、設問にはまったく答えていない。

事例「自由に投稿できるヤフーなどのコメント欄では、複数のアカウントを利用し大奥の意見に見せかける行為などに対して対策を行い、非表示数は約7倍になったが、潜在的に排斥意識がある投稿はまだ残っている。」(学生K)

次も設問に答えていない事例である。

添削事例「ネット上での不適切な言動というものはいくらも溢れています。~~そんな~~そうした中で大手企業のヤフーさんなどコメントを削除する行為が行われるようになり、差別などの人権侵害が減ったことはよいことです、質が

向上となつたした。」(学生A)

さらに、次の学生は、Ⅱの課題文に対して「設問に答えていない、問題をよく読むこと」とコメント欄で指導を受け、再提出を求められた学生であるが、再提出文を見ても課題にまったく答えていない。

事例「人それぞれには、いろんな個性、プライバシーがあると思う。人は、自分の人生があるので、その侵害に当たる行為はいけな。誰もが見えるところなので、侵害に当たらない行為をしたほうがよいと自分は思いました。」(学生N)

本章のはじめのところで、段落の書き始めは1マス空けるよう指導しても、添削されたものを読んでいないと解される学生がいることを指摘したが、これらの事例をみても明らかに「読んでいないこと」が分かる。ちなみに、Ⅱの課題に答えていない学生には再提出を求めたが、学生Kと学生Aを含め、その大部分は課題に沿った内容の文章を書いている。コメント欄を読んだものと解される。

9) 最後に、これら以外にも、添削事例に見られるような不適切な読点の打ち方、誤字、送り仮名の間違いも多くみられる。たとえば、「欄」の門構えの中が「東」ではなく「木」になっていたり、「真実」が「信実」となっていたり、送り仮名を間違えて「言ない」、「荒れない」と書いてみたり、実に多様である。また、いくら添削指導しても、文字が丁寧に書けない、1つの漢字が踊っているよう(偏・旁・冠・脚・垂・邊・構がばらばら)にしか書けない、筆圧が弱くて読みにくい学生もいる。

以上、学生の文章力の問題点を列挙してきたが、これまでに取り上げた事例の内容から、その多くがⅠ及びⅡの設問に関連した文章であることにお気づきであろう。添削指導を重ねれば、無謬ではないにしてもそれなりの文章を書くことができるようになっていくことを、次に紹介したい。

事例①「内線に混^マき込まれた子どもたちには心のケアなどの支援が必要だと思います。人を殺めたという傷を少し塞ぐことや、軽減させることが大切だと思います。もう誰かが息途絶える姿や、血を流す姿を子どもたちが見ないことを願います。」(学生A)

この学生は、文体(ですます調、である調)が統一されていない、設問を「読んでいない」事例として取り上げた学生である。また1回目の添削で段落の書き

始めは1マス空けるよう指導した学生である。誤字や表現において少し不自然な所もあるが、段落の書き始めは1マス空け、設問をよく読み、「心のケア」という観点から論じている。

事例②「元戦闘員の子どもたちには、心の傷を癒やすカウンセリングなどの支援や、彼らの過去が知られぬように個人情報保護が必要だ。また彼らには、普通に街を歩けるような、とにかく安全に生きられることを望む。」(学生D)

表現の不自然さや、設問の「どんな支援や保護が必要ですか。その一つを挙げつつ」という課題に対して、「カウンセリング」「個人情報」「安全」と、一つに絞り切れていないところもあるが、3)で指摘した文末での同じ語句の繰り返しは改善されていることが分かる。

事例③「私は、元戦闘員の子どもたちには普通の生活を過ごして欲しいと思う。そのためには、心のケアをして、ウガンダ政府が身の回りの保障をして、今までの地獄の日々を乗り越えられるような幸福の日々を過ごして欲しい。」(学生E)

話し言葉と書き言葉の区別ができていない事例として取り上げた学生の文章である。「…して、～して」と繰り返しの表現が見られるものの、南スーダンの子ども兵に対するウガンダ政府の支援の必要性が学生の視野に入っている。

事例④「元戦闘員の子どもたちには、1日3食の栄養バランスのある食事をするように促す支援が必要である。少しでも早く心身の健康が保たれ、戦前の日常生活に戻り、子どもたちが笑顔で暮らせることを望む。」(学生J)

これは、慣用表現が守られていない、主語と述語が対応していない事例として取り上げた学生の文章である。表現に回りくどさが見られるが、「食事」という観点から支援の必要性を説いている。残念なことに、この課題文では段落の書き始めは1マス空けていない。

事例⑤「彼らにはこれからの生活のために発達した教育の支援が必要だと私は思う。そして、さまざまな教育を受けることにより、将来的に多くの分野また自国だけでなく他国でも力を発揮できる。そういった境遇を私は望む。」(学生K)

設問を「読んでいない」事例として先に取り上げた学生の文章である。句読点の打ち方や表現で添削指導しなければならない所もあるが、しっかりと問題を読み、「教育の支援」に絞った意見が書けている。

4. 添削指導から見えてくる課題

筆者らは、この1年間、自主講座で始まった文章力養成講座を「キャリア形成Ⅰ」及び「キャリア形成Ⅱ」という単位認定の正規科目の中で行ってきた。日本語検定対策の小テスト問題の作成、教材研究(朝日新聞の「天声人語」や「記事」の選定)、「協道学習教材」の作成、添削指導と、かなり多くの時間を投入して取り組んできた。特に、本稿で紹介したような添削指導を約30名分行うというのは、大変なものであった。しかし、その労力に呼応する形で、数値で表せないものの、学生の文章力は確かに向上している。

個々の学生の文章力を養成するというのは、地味で根気のいる教育である。このような基礎教育は、学問や教育にすぐに「成果」を求める風潮に流されることなく取り組んでいかなければ、それこそ「成果」が得られないものである。「これさえ守れば優雅で気品のある文章を書けるようになる」という規則は存在しない。これはアダム・スミス(『道徳感情論』第3部第6章、1859年)の言葉であるが、「優雅で気品のある文章」でなくとも、自分の考えを文字で表現する普通の文章でもそうである。大学入試に記述問題を導入することを巡ってなされている議論にも、採点する側の困惑が見え隠れしている。普通の文章が書ける「規則」があれば、指導する側もそれほど困らないはずである。誤字や文法的な誤りや意味不明の文章は指摘できても、「こうしてはいいかか?」といった形で、指導していく他ない。添削指導は学生と教員のキャッチボール(キャッチセンテンス)である。そのような基礎訓練の繰り返しのなかで、個々の学生の文章力は向上していくものと考えられる。

大学全入時代のなかで、私たちの目の前にいる学生は実に多様である。なかには、文字を読まない学生、文字が読めない学生、文章の内容を理解しようとししない学生、内容が理解できない学生、文章で表現できない学生だけでなく、そもそも学習習慣がない学生、学習意欲がない学生もいるということを看過してはいけない。このような状況のなかで学生の文章力を養成するには1年間という期間はあまりにも短すぎる。

そこで、今筆者たちが感じている学生の文章力の向上

の「手応え」をより確かなものにするために、このような教育を大学4年間継続して行くことを提案したい。せめて1年次及び2年次生は必修科目の中で、いわば強制的環境の中で、文字を読ませる、文章を読ませる、文章を書かせるという反復教育を行う必要がある。また、文章を読んで理解できた喜びを積み重ねるために、多読よりも精読に重点を置いた指導を徹底することが重要である。教材としては、広い教養を身につけるためにも、量的的にも、新聞記事が一番適しているように思われる。また、文章を書くためには、語彙や表記や文法の知識など表現する力はもちろんであるが、その前に自分の考えを作り上げる力が求められる。つまり書く内容についての幅の広い知識が必要である。筆者たちが「天声人語」や「記事」に関連した「協道学習教材」を作成してきたのも、そのためである（参考までに、資料として「協道学習教材」の1例を付す）。3年次以降には、実習記録や報告書、卒業研究と書く力が求められる。その基礎的な文章力を2年間かけてじっくりと養成すべきである。

3年次及び4年次になれば、卒業後の進路や卒業研究と、避けて通れない自分の課題が見えてくるとともに、自主的な学習意欲が個々の学生に芽生えてくる。その自

主性を前提に、新聞記事だけでなく、学術書や専門書を教材に取り上げた授業を選択科目の中で実施することも考えられる。

ちなみに、2016年度から行っている自主講座「文章力養成講座」の2017年度の受講生は非常に少なく、後期では3名であった。これが学生の自主的な学習意欲の現状である。その3名は2年間受講し続けている社会福祉学部の学生で、学習意欲のある学生である。そのうちの一人は最初の1年間は文章の提出ができなかったが、2年目はすべての課題文を提出し、添削を受けている。最後の授業でその学生は、「<過去の私>と<現在の私>」というタイトルで、「文章力養成講座と講義のレポートを毎回提出できた。…(略)…観察することの重要性、それを文章で表現する重要性を学んだ。来々の課題は、さらに文章表現力を高めることである。」と書いている。このような学生が一人でもいてくれることで、これまで取り組んできた労が報われるとともに、講座の意義はあったと自負している。

書店には、文章の書き方、レポートの作成の仕方等々、実に多くの著書が並んでいる。形式は学べても、それで文章やレポートが書けるわけではない。文章を上手に書く

資料

朝日新聞記事「子ども兵『地獄の日々』」の「協道学習教材」

1. 南スーダンとアフリカ諸国



2. 世界の紛争地



いうのに「王道」,「規則」はない。個々の学生の視圏を広げ,その思考方法を尊重しながら,その都度添削指導をしていく。このような地道な教育を正規のカリキュラムの下で行うことが大学教育に求められている。

3. ユニセフ (UNICEF; 国連児童基金)

(United Nations International Children's Emergency Fund 本部ニューヨーク)

ユニセフ (UNICEF: 国連児童基金) は, 1946 年設立の, 世界中の子どもたちの命と健康を守るために活動する国連機関です。すべての子どもたちの権利が守られる世界を実現するために, 世界 150 以上の国と地域で, 保健, 栄養, 水・衛生, 教育, HIV/エイズ, 保護, 緊急支援, アドボカシー (政策提言) などの活動を実施しています。 <ユニセフ HP より>

【2017年8月31日 ジュバ (南スーダン) 発】

南スーダンでは, 何年も続く紛争と不安定な情勢により, 子どもたちの間で重度の栄養不良の危機が広がっています。現在, 100 万人以上の子どもたちが栄養不良に陥り, 27 万 6,000 人が重度の急性栄養不良によって命を脅かされる状況に置かれています。ユニセフはパートナーとともに, 子どもたちの栄養治療ケアを実施しています。

【2017年7月8日 ジュバ (南スーダン) 発】

2013 年 12 月の紛争勃発以降, 少なくとも 2,500 人の子どもが死傷し, 254 件以上の子どもに対する強姦および性的暴行事件が報告されています。1,700 人以上の子どもが武装勢力や武装グループの仲間に入り, 徴用は今も続いています。

【2016年12月15日 ジュバ (南スーダン) 発】

ユニセフ (国連児童基金) は本日, 南スーダンで

2013年に紛争が勃発して以来、武装勢力による子どもの徴用・徴兵が後を絶たず、2016年だけで1,300人の子どもが徴用・徴兵されたと発表しました。2013年の紛争勃発以降、徴用・徴兵された子どもの数の累計は1万7,000人を超えました。

4. 子ども兵

「子ども兵」とは（ユニセフ）

＜『ケープタウン原則』1997より＞

‘Child soldier’ in this document is any person under 18 years of age who is part of any kind of regular or irregular armed force or armed group in any capacity, including but not limited to cooks, porters, messengers and anyone accompanying such groups, other than family members. The definition includes girls recruited for sexual purposes and for forced marriage. It does not, therefore, only refer to a child who is carrying or has carried arms

＜Cape Town Principles and Best Practices, 1997＞

2014年「子どもは兵士じゃない（原題：Children, Not Soldiers）」キャンペーン

現在、子どもを政府軍の兵士として徴用している国は、

8カ国（アフガニスタン、コンゴ民主共和国、チャド、ミャンマー、ソマリア、スーダン、南スーダン、イエメン）あります。今後2年をかけて、子どもと武力紛争担当国連事務総長特別代表とユニセフ、国連、パートナーのNGOは、これら8カ国の政府が子どもの兵士を解放し、子どもたちが市民生活に戻り、また政府が子どもを兵士として徴用することを停止・予防する計画を完全に実施できるように、支援を倍増します。支援には、技術的専門知識の提供のほか、行動計画実施への障壁を明らかにし、現場での取り組みにさらにリソースを提供することなどが含まれています。

5. 南スーダンと日本

1899年 イギリスとエジプトによる北部・南部スーダンの共同統治

イギリスによる南北分断統治

1955年 南部スーダンで自治独立を求め、第一次スーダン内戦が勃発（1955年～1972年）

1956年 南部を含むスーダンがイギリスから独立
北部人の政権／石油利権（南部に油田）／北部のイスラーム教徒と南部のキリスト教徒の対立
→南北対立

1972年 南部スーダンに南部政府を設置 部分的自治権を付与した「アディスアババ和平合意」を締結



子供兵士が登録されている地域

（ニュースウィーク日本版 2015年11月3日）

- 1983年 「アデイスアベバ和平合意」が反故にされ、第二次スーダン内戦が勃発（1983～2004年）
- 2003年 ダルフール紛争勃発（西部のダルフル地方における、非アラブ系住民とアラブ系住民の対立から起こった内紛）
- 2005年 南北包括和平合意（CPA）の締結→停戦
- 2008年 日本、国連スーダンミッション（UNMIS）への協力要請を受け、司令部要員2名を派遣
- 2011年 南スーダンが分離独立
「南スーダン共和国」成立（最も新しい独立国
アフリカでは54番目の独立国）
日本、国連南スーダン共和国ミッション（UNMISS）への協力要請を受け、現地調査司令部要員2名（情報幕僚・兵站幕僚）をジュバに派遣
- 2012年 日本、さらに司令部要員1名（施設幕僚）をジュバに派遣、その後順次「施設部隊」を派遣
- 2013年 政府軍（最大民族ディンカ族が中心）と反政府勢力（ヌエル族が中心）の武力衝突
- 2015年 首都ジュバで大規模な「戦闘」
司令部要員1名（航空運用幕僚）をジュバに派遣
- 2017年 自衛隊の撤退

南スーダンでの自衛隊の平和維持活動(2012年～2017年)

第1次隊～第11次隊 計3,854名

第11次隊：平和安全法制に基づく新たな任務（「駆けつけ警護」と「宿営地の共同防護」）